

# 氷 華

HYOKA

NEWSLETTER OF HOKKAIDO ASAHIKAWA MUSEUM OF ART



「木」と「あそび」美術館 会場風景 ①森の美術館「木夢」の作品展示コーナー ②北海道教育大学旭川校連携ギャラリー・トーク  
③木育資料と道立図書館の木育図書の紹介コーナー ④北海道旭川農業高等学校の生徒と「スロープトイ」

展覧会報告	北の水彩	P2
	「木」と「あそび」美術館	P3
	旭美・この一点	
	— 黒田辰秋《神代櫻彫文飾棚》—	P4
	荒井善則展	P5
道北の美術28	遠藤享氏	P6-7
収藏品から	百瀬寿《NE.Blue to Black》	P8
常磐通信		P8

展覧会報告 「木」と「あそび」美術館 関口千代絵

会期：2021年1月9日（土）～3月31日（水）  
会場：第1展示室

本展のテーマはずばり「あそび」。鑑賞の主体である「目で見る」ことによって「あそび」を感じる作品はもちろん、実際に手で触れて「あそぶ」おもちゃもまじえて楽しんでいただくことが、当初の展覧会の目指すところであった。

ところが新型コロナウイルス感染症対策という課題が出てきた。（公財）日本博物館協会のガイドラインには「展覧会の実施に当たって特に留意すべきこと」として、「直接手で触れることができる展示物（ハンズオン）は感染リスクが高いため展示しないことを原則とし、止むを得ない場合は職員が管理して消毒を徹底する。」と示された。つまり手で触れて「あそべない」、という展覧会の根本に関わる課題である。

もう一つのテーマである「木」は消毒が可能なのか、それを来館者に触ってもらってよいのか、を検討する上で、木を研究している北海道立総合研究機構森林研究本部林産試験場や、北海道水産林務部森林環境局森林活用課などに情報を提供いただき、可能な範囲で展覧会を実施することとした。木の消毒については、表面の加工の際に使う材料によって、通常のアルコール（液体）が使用できないなど、100パーセント確実な方法がないため、消毒が可能なものでも安全を確保できる範囲で「あそべる」ものを選び、会場内での対応を検討して実施にこぎ着けた。今後、「ハンズ・オン」展示については、全国の美術館で実施方法が検討されていくのではないだろうか。当館でも、他館の状況について情報を集めながら、今回の状況についてさらなる方法の改善を検討していくことが必要であろう。会場ではやはり、実際に木の感触や木と木がぶつかりあう音を聴くなど、体験を通して、その魅力を感じた来館者からの感想が寄せられている。やり方を工夫しながら、「ハンズ・オン」は続けていきたい展示手法の1つである。

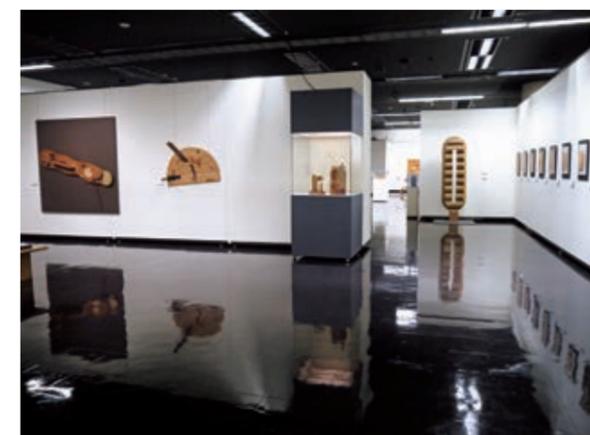
さて、手で触って遊べるものに制限があったこともあり、手で触らずに目で見て「あそび」を感じる作品を充実させた。当館は「木を素材とした造形作品」という収集方針のもと、開館から38年間にわたって様々な作品を収集してきた。作品の収集は、当館で開催した展覧会の際に、出品作品を購入するなどして集められており、今回は1987（昭和62）年開催の「はこで考える—あそびの木箱 '87」、92年の「はこで考える—

あそびの木箱1992-93」、85年「木の美—絵画と彫刻のあいだ」に出品されたのをきっかけに収蔵された作品を中心に展示した。戦後、表現技法が多様化する中で、1970年代前後から見直された「木」という素材を使用する作家が増え、80年代には絵画や彫刻といったジャンルを超えた造形が生まれ、40～50年たった今でも当時所蔵された作品はおもしろく、見て「あそび」を感じるものが多い。

また今回は、当館の作品に加えて、北海道の美術館等が連携する取り組み「アートギャラリー北海道」の連携館の1つである森の美術館「木夢」（西興部村）から日本を代表する組木のパズルの作家である小黒三郎や小黒がデザイナーとして契約していたスイスの木のおもちゃ会社「ネフ社」のおもちゃを借りて展示した。優れたデザインで世界中で評価を受けているおもちゃの数々は、大人の心をも引きつける世界で愛されるものである。

おもちゃは、消毒できる安全なものを、来館者に遊んでもらっており、その1つが北海道旭川農業高等学校の森林科学科で制作された「スロープトイ」と呼ばれる作品である。スロープ、つまり勾配をつけた木の板の上を球が転がるときに出る音を、曲になるように木の板を調整し、木の箱の中に取り付けている。高校生が工夫しながら作ったこのおもちゃは、大人にも大人気。展示室内から美しいメロディーが聞こえる。

この展覧会を通して、木の色や木目などの見た目に加え、音や手触りなどから木の素材としての多彩な魅力を感じていただきたい。（当館学芸員）



展覧会報告 北の水彩 佐藤由美加

会期：2020年9月12日（土）～11月1日（日）  
会場：第1展示室

「北の水彩」展は、「アートギャラリー北海道」連携館である北海道内の美術館のコレクションを活用して、明治以降の日本の水彩画史を概観しながら北海道の水彩画を紹介する展覧会だった。水彩画展においては、明治の隆盛から大正の模索、中西利雄らによる昭和の振興という流れが一般的である。しかし、道内には、水彩画にかぎらず明治期の作品が少ない。水彩画の流行を生んだ明治の人気作家をどう紹介するかが当初の課題だったが、大下藤次郎の『水彩画之葉』などの書籍や雑誌『みづゑ』を展示し、当時の人々が、啓蒙書や雑誌のカラー口絵、絵はがきを見て美しい水彩画に憧れた様子を再現した。

大正期に関しては、日本水彩画会創立会員の一人で小樽育ちの平澤大暲の作品によって当時の水彩画の傾向を紹介できた。平澤は、帝展出品作《春近し》で、水彩絵具の上にニス塗り、テンペラ画も描いている。大正期の水彩画家たちは、油絵に比肩する画面を作ることに腐心しており、平澤の作品もそうした一例といえる。

昭和初期の水彩画界を牽引した中西利雄は、普及と啓蒙のため、全国各地で講習会を開催し、1938年と翌年、札幌で開かれた講習会に講師として来札している。全道から参加者が集まり、中西の都会的な作品と水彩画に対する真摯な思いに感銘を受けて水彩画の魅力にめざめた若者は多かった。このとき中西は、《札幌の夏（北大）》という小品だが、中西らしい色鮮やかな作品を制作している。講習会后、地元の展覧会ではその影響が顕著だったという新聞記事が残っているが、参加者だった佐藤進は、この中西作品に酷似した絵を描いている。昭和初期、地元の道展や日本水彩画会展への出品者が少しずつ増加していたが、講習会后は、さらにその傾向が強まったという。

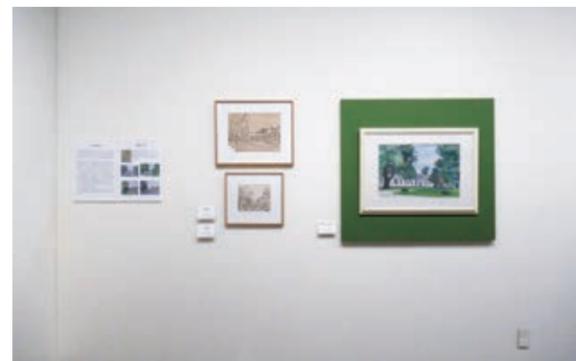
北海道水彩画壇の第一人者だった繁野三郎、戦後の北海道水彩画壇を牽引した間宮勇、佐藤進らの作

品については、今回、初期から晩年まで数点を展示したが、昭和初期にはみな、油絵のように見える描き方の作品が多く、大正期以降、油絵に見劣りしない水彩画を志向していた水彩画の傾向を伝える。彼らがそれぞれ、独自の水彩画らしさを発揮するのは戦後のことであり、教員を勤めながら各地域の画壇を支える存在となっていた。昭和の終わりから平成の北海道水彩画壇を支えたのは、戦後、水彩画を本格的に描き始めた宮川美樹や白江正夫らの世代だった。白江は、中西と直接の接点はないが、その著書や言葉を心に刻んでおり、中西の死後も、水彩画界においてその存在は大きかった。白江と宮川は、2014年と2017年に相次いで鬼籍に入り、会場では並んで展示された二人の作品を前に関係者からの惜しむ声が聞かれた。さらに本展では、地元旭川市近郊に在住し現役で制作する高松秀人、宮西隆生の二人、2019年のVOCA展出品作家で若手として期待されている札幌の石垣渉の作品を加え、明治から2020年までの作品約100点を紹介した。緻密で繊細な作品や油絵のような作品までさまざま、来場者からは「水彩画のイメージがかわった」「水彩絵具でこんな表現ができるのか」という声がよく聞かれた。

佐藤進は、旭川に長く在住した画家で、1997年には回顧展も開催されている地元を代表する画家の一人だが、今回、当館で初めて水彩画展の中で紹介し、北海道水彩画壇においてどのような位置づけの作家だったかを展覧する機会となった。

また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実施を見合わせた関連事業もいくつかあったが、地元作家や遺族によるギャラリー・トークを数回実施し、どの回も盛況だった。その際、美術館という場所で、作品を鑑賞すること、他者とふれあう機会をもてたことへの喜びの声を多く耳にし、美術館の使命を再認識した。

（当館学芸課長）



中西利雄作品、右は《札幌の夏（北大）》



佐藤進作品、左端は中西利雄の講習会の頃に描いた作品で中西の影響が強い

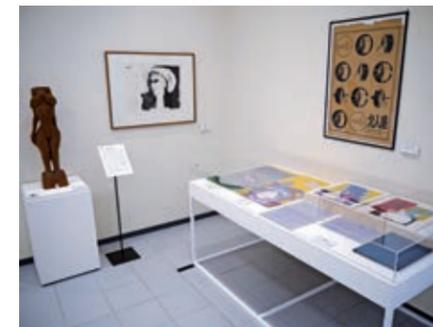
展覧会報告 荒井善則展 無意識が世界を版にする 門間仁史

会期：2021年1月9日（土）～3月31日（水）  
会場：第2展示室

荒井善則（1949～長野県出身）は、1970年代前半から旭川を拠点に活動をはじめ、以後、当地の主たる美術運動に中心的な立場で関わり続けてきた、旭川を代表する現代美術家のひとりである。これまで同時代的な美術の動向を意識しつつ、ドローイング、パフォーマンス、オブジェ、インスタレーションなど多岐にわたる表現を試みてきたが、とりわけ版画は、美術を志した青年期から今日に至るまで、荒井の主な表現手段であり続けている。本展ではそうした版画の作品を中心に、約50年にわたる荒井の作家活動の軌跡を、46点の作品、10点の資料、さらに制作記録映像によって跡づけた。

展示を構成するにあたり、企画者がまず頭を悩ませたのが、荒井の作家活動の出発点をどこにおくかという問題である。初めての個展や公募展の出品作とする事も可能であったが、本展では、あえて大学の卒業制作に光を当てた。荒井は東海大学在学中に、同学の助教授で親交のあった彫刻家・小島廣志と調査旅行のため韓国に赴き、それを元に卒業制作に取り組んでいる。卒業制作の作品は版画ではなく水彩画で、内容もその後本領としてゆく抽象ではなく具象的なイメージを描出したものであったが、そこに発揮されている色彩感覚には、明らかに近年の荒井の作品と同じ傾向が認められた。そこでこれを展示の冒頭で紹介し、荒井の作家性が学生時代にすでに形成されつつあったことを示した。

さて、荒井が旭川に移り住んできたのは、大学を卒業した1972年のことである。同年4月に旭川に開校する東海大学工芸短期大学に、デザインの授業を受け持つ助手としての赴任であった。授業の準備に明け暮れる日々の中で、荒井は制作への渴望を募らせてゆくのだが、その反動で生み出された作品の数々によって、荒井の旭川での作家活動が本格化してゆく。この時期の作品のひとつ《遷》（1973年）は、第50回の春陽展で初応募にして初入選を果たした記念碑的な作品である。原版から入選通知まで手元で保管されていたことから、その喜びがいかにか大きかったかがうかがい知れる。本展ではこの《遷》とともに同時期の木版やエッチングの作品を展



展示冒頭、ケース内に卒業制作が並ぶ。左の壁面版画と木彫が小島廣志作品



作家活動初期から今日までの作品を一覧。手前中央の額装の作品が《遷》

示することで、これまで荒井自身も積極的に語ってこなかった活動初期の様子を示す、貴重な機会となった。

さらに本展では、李禹煥ら「もの派」の影響が色濃い80年代の実験的な作品から、「プリント・アドベンチャー」展への参加を通じて版への考察を深めた80年代後半から90年代にかけての作品。さらにイギリスへの研修旅行を経て自然への関心を深めたことを契機に、その後の荒井の主要な仕事となる「Soft Landing to Season」シリーズの展開がはじまる90年代後半以降の作品。そして、シルクスクリーンとモノタイプの混成技法によって独自の表現を切り開いた2010年代以降から今日までの作品を年代順に展示して、作風の変遷を辿った。現代美術の動向、世界的社会的な諸問題を念頭にコンセプチュアルな課題に取り組んでいた荒井が、自然や自身の身体性と向き合うことで大きく作風を転じる様子を一望するのは壮観であった。荒井にとっても、これまでギャラリー等での個展やグループ展を専らとし、常に最新作による展示を行ってきただけに、自身の過去の作品を年代順に見直すのは新鮮な経験だったという。

ところで、荒井の作家活動の幕開けを語る際の不可欠な要素のひとつに、70年代から80年代にかけて展開された旭川美術運動との関わりがある。この時期の旭川では、現代美術の草分け的存在であった一ノ戸ヨシノリが牽引役となって、若手作家たちとともに様々な美術展やイベントを企画した。荒井もそこに中心的な立場で関わることで、旭川における現代美術の礎を築いたのだが、本展ではそれらの美術運動については、広報印刷物や記録誌などの資料を展示して紹介するとどめた。旭川の美術の歴史を語るうえで重要なこれらの美術運動については、いずれ荒井以外の作家、作品も幅広く交えた展覧会によって紹介する機会を得たい。

(当館主任学芸員)

関口千代絵

展覧会報告 旭美・この一点一黒田辰秋《神代櫓彫文飾棚》

会期：2020年9月12日（土）～11月1日（日）  
会場：第2展示室

当館の収集方針の一つが「木の造形」。木を素材として使った工芸や彫刻の作品が253点（令和元年度末現在）収蔵されている。その中でも当館を代表する作品の一つが黒田辰秋《神代櫓彫文飾棚》である。人間国宝であり、民藝の代表作家でもある木工芸の巨匠、黒田辰秋（1904－1982）の晩年の名品は、展示機会が多いが、収蔵作品が1点のみのため、黒田という作家の特徴や制作背景などを交えて、じっくり紹介する機会はなかった。作家と本作の奥深い魅力を伝えることが、この企画の趣旨だった。

これまでの学芸員人生20余年、50本以上の展覧会を担当してきたが、最も難しい企画であった。なんといっても当館には黒田の作品がこの1点しか収蔵されていないのだ。作品1点では展覧会は成立しない、という課題をどう解決するか、悩んだ末にそのまま展覧会の名前を「旭美・この一点一黒田辰秋《神代櫓彫文飾棚》」とした。

さて、展覧会名は決まったが、内容はどうか。1点のみの展示という訳にはいかない。そこで展示する作品と資料によって、本作の魅力にせまるため、展示内容は大きく分けて二つのグループでの構成を考えた。一つは「民藝」である。河井寛次郎記念館（京都）の協力のもと、黒田の初期の頃の棚や資料の写真を展示し、あわせて道立文学館や道立近代美術館の作品（河井寛次郎、芹沢銈介、棟方志功、バーナード・リーチなど）によって、黒田と民藝について紹介した。二つ目のグループとして、当館の木工芸作品の中から伝統工芸の作品を展示した。割物で人間国宝の中臺瑞真、250年とも言われる歴史を持つ井波彫刻を代表する作家横山幹、江戸指物の伝統の継承者として活躍した須田桑翠など日本を代表する木工芸を見ていただき、木という素材の活かし方や伝統的な技法に触れることで、黒田の作品を技法や素材の面から深く知る契機とした。

「民藝」と「伝統工芸（木工芸）」という、黒田を理解する上で欠くことのできないテーマは、美術史において重要なテーマである。一方、重要なだけに難解な部分があり、これらをわかりやすく伝える難し



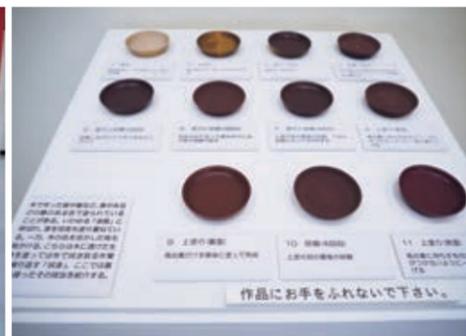
黒田辰秋を会場の中心に展示した様子

さにぶち当たった。工芸の技法一つをとっても、なかなかわかりにくい。特に黒田も手がけた漆の技法は、一般になじみがなく、どのように作られているのかその工程も多く伝えにくい。

そこで、今回は旭川市内で漆の作品を制作している堀内亜理子氏の協力のもと、「拭漆（ふきうるし）」の制作工程を、実際に漆をぬった木の皿を制作段階の順番に並べて展示して紹介した。漆を塗っては、拭くという作業を繰り返す時間と手間のかかる作業を知る機会となった。あわせて、参加人数は限られてしまったが、漆の技法を使って、陶器の欠けやひびをなおす「金継ぎ」の技法講座を開催した。参加者には漆の作業を通して、作品への理解を深めていただけたと思うし、最後にはまたぜひやってみようというリクエストの声がおり、講師である堀内氏のわかりやすい説明によるところが大きく、展覧会の関連事業として成功だった。

今回の展覧会は、黒田辰秋の所蔵作品が1点であるが、黒田作品についての調査を進める一つのきっかけとなった。展覧会準備の段階に民藝との関わりの中で、黒田の貴重な初期の棚を所蔵している河井寛次郎記念館（京都）や、黒田が「上加茂民芸協団」のメンバーとして交友のあった鈴木實のご遺族に、貴重な黒田の作品を見せていただき、話を伺うことができた。そこで知ったのは黒田の作品が愛され、日常生活の中で使われていたということだ。今後、さらに調査を進め、展示で紹介するときに、こうした使われていたものとしての魅力をいかにして伝えるか、ということが一つの課題であると考えている。作品は、「お手を触れないでください」が常識で、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点からもハンズ・オン展示の制約が厳しくなっている状況ではあるが、実際に使うことによってわかる作品の魅力の魅力をいかに伝えるか、工芸や家具を所蔵する館として検討していくことが必要だろう。

(当館学芸員)



拭漆の制作工程の説明

## 道北の美術 28 遠藤享氏（東京都在住）

遠藤享氏（1933～ 山梨県出身）は、少年時代を旭川で過ごし、若い頃、旭川のグループ展にも参加している。近年は、隔年で旭川で個展を開き、2020年夏にも旭川市内のギャラリーシーズで「遠藤享 版画展」（7月21日～8月3日）を開催。当館では令和元年度、作品10点を新収蔵し、「旭川ゆかりのアーティスト」展（7月11日～8月30日）で一部を展示した。来旭した遠藤氏に旭川での思い出と制作について伺った。

—お生まれは山梨県とのことですが。

遠藤：生まれたのは山梨の甲府ですが、父の家系が北海道の伊達、もとは亙理藩の出身なんです。伊達には親戚がいたので、子供の頃、行ったこともあります。父の仕事の現場が北海道のあちこちにあり、旭川にも来ています。父が仕事で山梨にいた時期に母と出会って結婚したので僕は山梨生まれです。幼い頃、会津若松に移って1年後には東京で小学校に入学しました。戦争で空襲が始まり、他の家族は東京のまま、自分だけ祖父母のいた山梨に疎開しました。東京では空襲がひどくなり、1945年に家族で旭川に移住し、旭川の中央国民小学校へ転校しました。

—終戦の年ですね。

遠藤：父はもともと北海道の人間でしたし、父の仕事の現場があったので、家族と一緒に北海道に逃げてきたんです。ところが旭川には軍隊や大きな工場もあったため、旭川に来たらまた空襲でした。

—旭川で商業高校に入学されていますね。

遠藤：いや、当時は国策で工業学校でした。1946年に入学したときは、旭川第二工業学校化学科です。生物が好きだったんです。その後六三三制になり元の商業高校で卒業しました。在学中は水彩画の佐藤進先生が美術の授業と美術部の顧問でした。関兵衛先生は退職直前だったと思います。1年下に菅原弘記、同級生の丹野信吾が美術部で一緒でした。今、個展をしているギャラリーシーズの久木さんのお父さんが、野球部

だった同級生の久木君と知った時は驚きました。

—文化祭の写真にみなさん写っていますね。丹野、遠藤、菅原といえば、1955年にグループ黄土を結成した6人のうちの半数です。それが同じ時期に在校していたのですね。高校卒業後は、上京されていますが、黄土の参加は東京からですか？

遠藤：ちょうど高校卒業の頃に、父の会社が倒産したので、叔母が婦長をしている東京の病院に勤務しながら油絵を描いていました。グループ黄土は、僕が旭川に休暇で帰ってきた時、菅原が言い出しっぺで始まりました。—戸義徳（ヨシノリ）は学芸大（現・北海道教育大学旭川校）の最終学年で菅原と勧誘に行きました。

—1957年、武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）に入学しますが、59年に中退されています。中退後、山口正城の指導を受けたと伺っています。山口さんは旭川出身の方ですが、どのような経緯だったのでしょうか。

遠藤：父も仕事立ち直り、絵描きは反対されたので、商業デザイン科に入りました。3年になる時、専門学校を大学にするので科を増やす計画があり、工芸デザイン、芸能デザイン、商業デザインなどの専攻に分けられ、何と僕は工芸デザインに決められました。抗議をしたのですが、受け入れられずすぐ退学届けを出して、やめちゃいました。呼び出しもありましたが行きませんでした。山口先生は、たまたまその頃、僕が以前勤めていた病院に入院していたんです。武蔵美をやめたので、僕は弟子にして欲しいと頼みましたが、すでに1人決まっていたかありませんでした。旭川の山口帽子店の息子だと知ったのはあとからです。でも先生は1959年に56歳で亡くなってしまうので、先生の御宅に行って作品を観てもらった期間は短かったです。

—武蔵野美術大学をやめたあと桑沢デザイン研究所で学ばれていますね。

遠藤：山口先生が、桑沢に通いながら、僕のところに時々来なさいと言ってくださったんです。先生は千葉大



個展会場（ギャラリーシーズ、旭川市）2020年



「旭川ゆかりのアーティスト」展会場 2020年



高校の文化祭での美術部メンバー  
左から丹野信吾、遠藤享、右端が菅原弘記  
中央二人 左が佐藤進、右が関兵衛

学で教えていましたが、桑沢の開校時バウハウス教育の授業内容について提言をしています。2年終了時、新しく田中一光主任の少人数（10人）のグラフィック研究科が出来て試験があり、入りました。その頃の桑沢には勝井三雄、佐藤忠良と指導者にはそうそうたるメンバーがいました。

—1960年代半ばからは、グラフィック・デザイナーとして活動されていますね。

遠藤：1966年にフリーになり、色々なデザインをしました。音響機器メーカーであるオーディオテクニカのデザイン、田中一光から学研の仕事を紹介されたり、大阪万博の仕事も手伝いました。旭川では旭山動物園のシンボルマークもデザインしました。当時の旭川市長五十嵐広三さんは高校の大先輩です。

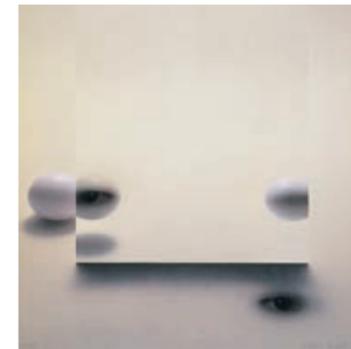
—五十嵐さんといえば、お兄様の琢郎さん、村山陽一さんなどと北海道アンデパンダンで活躍していた方ですね。

遠藤：村山さんはグループ黄土に賛同し会場の今井デパート（旭川）を紹介してくれました。兄の親友でもあり、兄が中心で集まった造型集団というグループに参加していました。第1回展のとき会場の村松画廊でボヤ騒ぎがあり、村山さんの150号ほどの作品を燃やしてはいけなと、僕が担いで銀座通りに運び出しました。村山さんは、結核で咯血しながらも制作を続けていましたが、若くして亡くなりました。

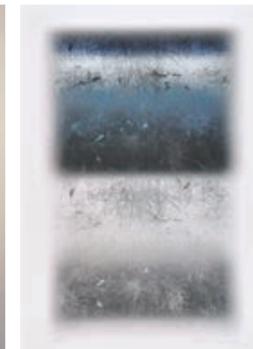
—版画を展覧会に出品されるようになったのは。

遠藤：僕の作品を見て日本版画協会に出したらと、勧めてくれた版画家がいて出品をした事があります。入選もしてましたが、やはり美術団体の公募展には向いてないと思いました。新しい従来の版画の概念から逸脱してもいいという表現意識があったからです。

—1980年頃から海外の版画ビエンナーレ、日本のビエンナーレなどでの受賞が続きます。



《SPACE&SPACE (EGG AND EYE)》1983年 当館蔵



《SPACE&SPACE/NATURE-0605》2006年 当館蔵

遠藤：当時、海外も日本も版画ビエンナーレが盛んだったんです。日本のビエンナーレで幾つか受賞しましたが、海外のビエンナーレにも出品する様になり、多くの受賞をしました。アメリカでも受賞しましたが、特にヨーロッパでは東欧圏での受賞とコレクションが多いです。

—先生のコレクションは国内より海外の方が多くですね。

遠藤：海外の所蔵が多いです。今も、ニューヨークでよく売られています。アメリカではコレクターが購入し美術館に寄贈することが多く、一昨年は一人のコレクターが僕の作品を3箇所の美術館に寄贈をしました。そんな事もありアメリカの美術館は多いですね。

—当館には1980年代の《SPACE & SPACE》シリーズ8点が収蔵されています。当時、先生の作品は、どうやって制作したのか、ご覧になった方がとても不思議がられていました。たとえば〈EGG AND EYE〉では、卵が浮遊してその中に人の目があります。今はパソコンで処理できますが、この頃はちがいますよね。

遠藤：この頃は当然フィルム撮影で個々の素材を別撮りして、目は目だけ紙に穴をあけて撮ったり、レンズの前に紙を出しボケを表現したり、二重露光をしたり……気が遠くなる方法で写真を撮り、その後それぞれの写真のフィルムをスキャナーに重ねて製版したり、アナログで可能な限りのアイデアを使って作品を作りました。〈EGG AND EYE〉みたいな80年代の作品を見る人はコンピューターだと思うけど、当時はフォトショップなんかなかったのです。デジカメやパソコンを使うようになったのは、1990年頃からです。大きなフィルムのスキャナー機も買いました。当時はどれも非常に高額でした。

—近年は風景が多いですね。

遠藤：家の近所や北海道、息子が住んでいるフィンランドなどいろいろな場所を撮影しています。旭岳も何回も行きました。場所はどこでもいいんです。パソコンの中には大量のデータを保存しています。何年も前の写真をひろい出す事も多いです。最初からイメージを決めて撮影しているわけではなく、何か表現の可能性を感じたら撮影します。自然を素材とした一因には新しい時間性と空間の探求もありますが、より自然との共生の意識が根底にあります。

—表現の可能性を求めてという姿勢は、フィルム写真で撮影していた時代も今もかわらないですね。

編集・文責 佐藤由美加（当館学芸課長）

## 収蔵品から 百瀬寿《NE. Blue to Black》



百瀬寿《NE. Blue to Black》  
120.0×120.0cm  
2015年、ミクストメディア

百瀬寿（1944-）は札幌出身。少年期に旭川に移り、北海道旭川東高等学校、北海道教育大学旭川校へとすすんだ。大学では根守悦夫にエッチング（銅版画）を学ぶ。在学当時から抽象画に取り組み、卒業後、岩手大学専攻科に進み、今日まで盛岡で制作活動を続けている。シルクスクリーン技法の版画により、色彩のグラデーションを生かした個性的な版表現の世界を開拓していった。

当館の収蔵作品はこれまでほとんど1980年代までに制作された作品だった。この時期までは色彩をばかしながら作ったグラデーションの作品で、その後80年代後半から、手漉きの紙や金箔、銀箔などを使ってグラデーションをつくり出している。本作は、手漉きの紙と箔、さらには岩絵の具を使用している。作品名の最初についている「NE.」はネパール紙からきており、ネパール

の手漉きの紙のほか、日本の和紙などを使い、手漉きならではの質感が特徴である。アクリル絵具で色を塗った上にこれら手漉きの紙を貼り、その紙を水で濡らして上からブラシでこすったり、紙やすりで削ってグラデーションをつくってゆく。

本作は、令和元年度、ボランティア常磐会より寄贈され、「旭川ゆかりのアーティスト」（2020.7.11-8.30当館第2展示室）ですでに収蔵されていた80年代作品と共に展示された。同会は、当館の開館時（1982年）からミュージアムショップと喫茶コーナーを運営し、収益金により作品を購入し寄贈しており、本作は17点目である。これまで当館に百瀬の2000年以降の作品はなく、本作によって作家の作品を体系的にコレクションすることができた。

関口千代絵（当館学芸員）

### 常磐通信

令和2年は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、美術館運営にも大きな変化をもたらした1年であった。

当館においても、感染拡大防止のため3月には臨時休館。4月24日から開催予定だった『『美術館に行こう!』〜ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方』が、国の緊急事態宣言による移動制限で作品の搬送が出来ず、やむを得ず中止。常設展も宣言が解除された5月下旬の再開までの1ヶ月余りの期間、展示の休止を余儀なくされた。

7月11日からは、京都国立近代美術館所蔵品を紹介した「京の美術」を開催。開催に当たっては、マスク着用、検温、手指

の消毒、緊急連絡先の記入、三密回避のための各種掲示や入場制限及びソーシャルディスタンスの確保、イベントの定員設定など、感染症対策に万全を期しながら再開した。

また、来館出来ない方に鑑賞する機会を提供するため、リモートにより展覧会を配信。コロナ禍における新しい美術館の楽しみ方を発見できた。

まだまだコロナとの闘いは続きそうだが、社会の変化に柔軟に対応しながら、職員の知恵を結集し新たな発想で付加価値を生み出し、より魅力的な美術館となるよう取り組んでいきたい。

嶋倉一寿（当館副館長）